

矢作川流域担い手事例集
調査へ行く前に心にとめておくこと
(調査実施者マニュアル)

2013.06.28 矢作川流域懇談会

●矢作川流域山村担い手事例集のミッション

- ①現場に行って、直接、現場の人たちの苦悩や喜びや課題に触れる → 生の声を引き出す！
- ②その生の声をみんなで共有しよう！
→ 報告集に取りまとめ、矢作川流域懇談会のホームページにアップ
- ③課題をあぶり出す → 集い、知恵の交換をする

●調査対象団体の条件

- 個人も可だが、できるだけ組織・団体。
- 自ら山の恵みに感謝し、山村に暮らす誇りを持ち、山村の資源、知恵、人のつながりを次の世代に継承することを目指して活動していること。

●調査の心得

正しく、深く、心も伝える。

- 実地対面取材で行う。必ず現地で代表もしくはキーパーソンと面接して取材する。
- ともすれば思いが入り過ぎたり、持論に誘導しがちなので、気を付ける。そのために異カテゴリーの者を含めた複数人で取材する。

***** 調査対象団体・調査実施者の選定までの手順 *****

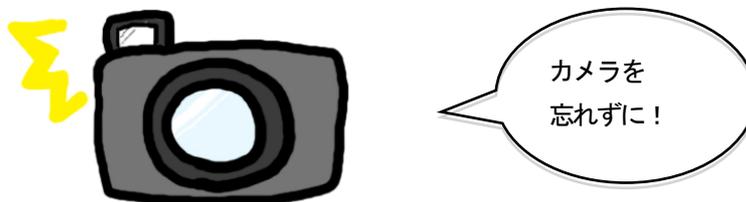
- ①本部推薦リストを参考にほかに「知られていないから広く知らせたい」「よく知られているけど、現場で実際に確認したい」などの団体について補完し、取材希望者を募る。
- ②事務局は、地理的日程的に連続して取材できる対象団体をひとまとめにして、各団体への取材希望者の中から調査者を確定し、その中で互選でチームリーダーを選ぶ。
- ③調査は複数人で行い、主執筆者、推薦者は副執筆者または同行者として参加する。これはできるだけ取材内容に客観性を持たせるためである。
- ④主執筆者は希望者の中から話し合いまたは抽選などで決定する。できるだけ異カテゴリーの者がふさわしい。
- ⑤各チーム内の調査対象団体の変更や調査実施者の配置はチームリーダーが行い、デスクに報告する。

*異なるカテゴリーで活動する人を主執筆者に

…森の人は川や海へ、海の場合は川や森へ行こう！ 新鮮な目と感覚で、客観的にとらえよう！

●調査手順

- 調査の趣旨を伝え、アポをとる。
- 指定の「取材ノート」の項目について取材する。(別紙「取材ノート」参照)
- また、チームごとにオリジナルの質問を1問設定して、取材する。
- 成果と課題を具体的に表し、「光と影」「喜びと苦悩」を象徴する写真を撮影もしくは借りる。



- 結果を誰にでも分かるように、「取材ノート」と「報告ノート」(ホームページに掲載する書式)にまとめる。(別紙「報告書」参照)
- リーダーは担当チームの調査後の総括報告を行う。(別紙「チーム総括ノート」参照)
- デスクへ交通費等の請求をする。
(自宅～調査地までの往復交通費。1カ所につき2名まで)

●調査スケジュール

本部は、
調査対象母集団の収集・確定を行う→リストを提示→取材希望者を募集

事務局の任務は

→調査対象へのアポ取り調整(地域担当者)、→アポ取りまとめが完了したら取材者募集を行う
→取材者の旅費、原稿料の支払い・清算処理を行う。→取材記事の提出催促や執筆支援
などを行い取材者から原稿を受け取り提出する。

旅費は実費支払い

車利用：できるだけ乗り合わせで、37円/km支給、(実距離申告またはweb算定)

公共機関：実費(領収書またはweb算定)・・・

原稿料は主執筆者に@5000円支払われる

(参考調査発表事例) ●流域再生交流会議ホームページ

こんなふうに調査結果を見ることができます。ダウンロードもOK。

(例)



自然環境保全活動団体 調査報告書 カテゴリ-No. B-2			
団体名	松名瀬干潟ウォッチング	代表者名	木原 寿代
活動地域	松名瀬干潟	団体URL	なし
活動内容 1997年より松名瀬干潟を守る活動を始める。本原代表が1人で活動している。活動を始めたきっかけは、松名瀬沖に人工島を造るために松名瀬干潟を埋め立ててしまう、という計画(今はなくなった)を知り、素晴らしい松名瀬干潟を守りたいと思ったから。 また、年に数回、依頼に応じて観察会や小学校の総合学習支援を行っている。観察会では、外部の専門家の応援がある。 自然状態の海岸を復活させるために、市民と協働で海岸のゴミ拾い、外来種の駆除等の保健活動を行っている。			
団体間の連携の実績の有無 観察会では、外部の専門家の協力を得られている。また、「開閉性海域における環境創生プロジェクト」(平成15~19年)で、三重大学や県の担当局と交流がある。しかしながら、松名瀬干潟に出入りする大学などの研究者は多くにも関わらず、誰がどの程度の調査を行っているかは、本原代表のみならず地元や行政も把握できていないため、干潟を調査する団体との連携はできていない。			
今までに行った調査研究 松名瀬干潟生物・植物調査(1997~)、観察会 松名瀬干潟事後マップ(砂浜の植物、ハマボウ群落、カニ等生きもの・植物)の作成 /マップ作成にあたっては三重県農水産工部水産室「みえのうみ」(監修)及び国土交通省三重河川国道事務所(写真提供)と連携			
現在直面している問題 ○地元の住民や行政が、松名瀬干潟を守るべき環境であることを認識しておらず、干潟保護への理解がなかなか広がらない。 ○干潟に出入りする人を管理する人(団体)がいない。 ○外部の様々な機関・団体が調査研究で出入りしているが、誰が出入りしているかも分からず、また、その結果が明らかになっていない。 ○干潟に関する生物の専門家を育てられる教育機関が三重大学しかないので、人材が不足している。 ○近年、浜がハイライダラーの拠点となりつつあり、干潟を傷めかねない心配がある。			
今後どんな情報が必要か ○松名瀬干潟に関する調査研究の結果 ○松名瀬干潟の調査研究を行っている機関名 ○干潟への出入り団体の調査に関する情報 ○人材募集に関する情報 ○行政・地域・NPO・専門家のネットワーク化への情報 ○ビジターセンター設立に向けての情報		 松名瀬干潟カニ穴	

矢作川流域山村担い手事例調査報告ノート（たたき台 001）

調査団体名		団体代表者名	
設立年		団体 URL	
活動地域		調査員	
取材日		レポート作成者	
(キャッチコピー)			
＜活動内容＞			
＜会のモットー(何を大切にしているか)＞			
＜設立から現在に至るまでに変化したこと＞			
＜連携している団体・専門家・自治体など＞			
＜山村再生や担い手づくりに関わる具体的な活動＞ex. 小仕事づくり、山村・森林資源活用 etc			
＜現在直面している課題＞			
＜今後やってみたいこと＞			
＜そのためにはどんな情報・人脈が必要か＞			

<p><チームオリジナルの質問></p>	
<p>質問内容 :</p>	
<p>答え :</p>	
<p><その他、伝えたいこと></p>	
<p>(写真 : キャプションも入れる)</p>	

●長野県

根羽村（紹介文担当：南木）

根羽村森林組合

「親が植え、子が育て、孫が伐る」
矢作川上流域・水源の森を育て、良質の「根羽スギ」を下流のあなたに届けたい。
地域最大の資源である 森林資源を活かしたトータル林業の取り組み。
間伐体験等の木育活動の推進。 JAS規格取得による安定した品質。注文に応じた部材の供給。
持続可能な林業立村の一翼をになって。

根羽杉っこ餅

村の元気なお母さん。畑から食卓まで、自主自立で出来た、6次産業化と地産地消。
自分の家の畑で採れた、季節毎の食材を生かし、各種の餅やカラスミ、田舎の家庭的な食事を様々なイベント等で、提供しています。

根羽村猟友会

山遊びの達人が集う。有害獣対策からの、特産品を活かしたジビエ食材の安価な提供まで。
ネバーランドを始めとした地元商工会や、大学との連携等で、安価で美味しいジビエ料理の開発、普及に取り組んでいます。
今日も村のおじいさんが生き生きと山で遊んでいます。

●岐阜県

恵那市（紹介文担当：丹羽）

恵南森林組合

現場作業員ひとりひとりのプロ意識がほかの森林組合と比べて出色。
ドイツフォレスターを毎年招請したり、架線、高所特殊伐採など進取の気風旺盛。
カッコイイユニフォームやTシャツ、小物作りなどにもこだわり。

NPO法人東濃・森林づくりの会

本来従属か競争関係にある素材業者と森林組合の協働でレベルアップを目指す
日本でも珍しい集団。それを支えるのは地域愛と林業への誇り、使命感。
ミッションが明確。

NPO法人奥矢作森林塾

放置林の整備から始まったNPOが山村の緊急課題に真正面から取り組んだ。
しらみつぶしの空家調査、本格リフォーム塾、定住対策、地域おこし協力隊、
1年間で23組の定住を世話した。徹底的に世話を焼き地元とよそ者の信頼を得ることが全てか。定住促進舞曲のお役所に爪の垢を煎じて飲ませたい。

NPO法人福寿の里自然倶楽部

原生林ツアーから森林環境教育まで、地元の豊かな資源とマンパワーを
最大限に活用して地域の誇りを呼び覚ましている。

●愛知県

豊田市（紹介文担当：洲崎、*印は長澤）

矢作川水系森林ボランティア協議会*

矢作川流域で活動する森林ボランティアグループ（現在14団体）が集まって作った協議会で、「山の手入れを知らない素人山主さん」と森林ボランティアが交流・学習することで、「山仕事の心と技と楽しさ」を伝えることをめざしています。矢作川森の研究者グループとともに人工林が荒廃している現状を科学と五感で明らかにする市民参加型の人工林調査イベント「森の健康診断」を主催しており、講習会や合宿なども行っています。

とよた森林学校

市町村合併により森林率が約7割になった豊田市は、森林や林業について学べる多数の講座で構成されたとよた森林学校を2006年に開校しました。こうした取組は市町村としては全国で初めてです。一人でも多くの市民が森林や林業に親しむことと、豊田市内の森林、特に人工林の保全と活用を推進することがねらいです。林業・森林活動に関わる人材育成コースの講座と、広く市民を対象とした森林・林業の理解者「森の応援団」育成コースの講座があり、豊田市民以外でも受講できます。

とよた都市農山村交流ネットワーク

豊田市では、市内の3小学校で5年生を対象とした2泊3日の農山村体験を実施してきました。このセカンドスクール事業を受け入れてきた農山村の住民有志が集まって都市と農山村の交流について話し合い、2008年にとよた都市農山村交流ネットワークを創立しました。都市と農山村の交流事業、幹事会、農家力や連帯力をアップするための研修会、ホームページやニュースレターによる情報発信、都市部住民を農山村の仲間にする「山里学校」などを、いずれもほぼ毎月開催しています。

豊森なりわい塾

「豊森」とは豊田市、トヨタ自動車、NPO法人地域の未来・支援センターの協働による、森林を活用した「人づくり」「地域づくり」「仕組みづくり」のプロジェクトです。多様な人材によって森を中心とした自然生態系の利用を軸とした地域循環型・持続型社会のしくみを作る「豊森モデル」の構築をめざしています。2年間の連続講座と各種実習、自主活動を通じ、山里で自立して暮らせて、山里の再生に寄与できる人材を育成しています。2013年4月から第3期を開講中です。

株式会社M-easy

2009年から豊田市旭地区で2年間実施された「日本再発進！若者よ田舎をめざそうプロジェクト」では、全国から募集した若者10名が同地区に住んで、安全・安心な農産物の生産と流通に携わりました。この時指導にあたった株式会社M-easyはプロジェクト終了後も旭地区に残り、「みんなでつくってみんなで分ける野良仕事」「福蔵寺ご縁市」「まちといなかのご縁づくり田んぼ」「山村体験プログラム」「旭高原元気村食と農の体験プログラム」などの事業に取り組んでいます。

旭木の駅プロジェクト*

間伐材などの残材を地域通貨に替えて流通させることで、森林保全、商店振興、山主の意識喚起など、多面的な効果が得られるプロジェクトです。参加者が木材を木の駅へ出荷すると、「モリ券」という地域通貨が支給され、これを地域の商店で使用することで地域活性化にもつながります。木材は業者が買い取り、チップや薪などとして利用されます。

千年持続学校

若者の田舎への移住を阻んでいる要因として「住むところがない」「生業がない」「医療機関がない」「高等教育機関がない」の4つがあげられます。こうした問題に取り組むため2011年、千年持続学校の「住まい作り講座」が開講しました。大工の経験がない人々が集まり、手弁当で参加している建築士や大工らの指導を受けながら豊田市旭地区に家を建築しています。地元の人工林の木を伐り出すことから始まった家づくりは、2013年7月に建前を迎えました。

NPO法人都市と農山村交流スローライフセンター

スローライフセンターは都市と農山村の交流を通じて森林の大切さや自然の素晴らしさを多くの人に知ってもらい、自然の一部となり自治的な生き方を創ることをミッションとして2005年に設立されました。矢作川水系森林ボランティア協議会やとよた森林学校などとの協働による森林ボランティアや森林観察リーダーの育成、森林を学ぶ講座や炭焼き塾の運営、自然農の田んぼづくり、各種市民団体や行政との連携を通じて持続可能な豊田市、矢作川流域圏づくりをめざしています。

おむすび通貨

地域共同体の再生を目的として2010年に足助で生まれた「おむすび通貨」は、世界初の米本位制地域通貨です。有効期間内は提携する豊田・岡崎・名古屋等の100を超える地域密着型の事業所で支払いに使い、有効期間が切れると提携農家が作ったお米に換えて食べられます。現在、円頓寺などの商店街でおむすび通貨を使った活性化の取組が進んでいます。また、こどもがおむすび通貨を稼いで使い合えるイベント「こども夢の商店街」が各地で開催され、大きな話題を呼んでいます。

green maman

2007年に活動を開始したgreen mamanのメンバーは4人のお母さんで、「戦争のない平和な社会であってほしい」と願い、環境・平和・暮らし等の情報発信をしています。主な活動として、豊田市産の安心・安全にこだわった農産物や手づくり雑貨が売られる朝市の開催、水やエネルギー、食と農の問題、自然農や自然療法をテーマとした「暮らしの寺子屋塾」、味噌仕込みや保存食づくり、野菜・雑穀の料理教室を行う「mamanの台所」、米づくり等を行っています。

農業法人みどりの里

みどりの里は2008年から、豊田市内で無農薬・無肥料の自然栽培により米、イチゴ、野菜を作っています。自然栽培は植物が本来持っている自然の力をひきだすため、生命力あふれる作物が育ちます。みどりの里が作った農産物は食の鮮度と安心・安全、生産者との顔の見えるつながりをモットーに豊田市内に展開している食品スーパー（株）やまのぶに卸されています。また、やまのぶとの協働による加工食品やスイーツの開発も進んでいます。

岡崎市（紹介文担当：沖）

NPO法人中部猟踊会

代表の日浅一さんは十数年前、山村集落の高齢化と温暖化による獣害の増加に直面し、対策の必要性を感じて、昔修業した技が地域のお役にたてばと考えて会を立ち上げられたそうです。しかし、農家は農作物に被害を与える野生生物の駆除を望むのに対して、猟師は野生動物を、山菜やキノコと同じように山の恵みとして考えています。また捕獲した動物は苦しませず命を奪うことや、命のやり取りをして肉を頂くのだから余すところなく美味しく頂くことを心がけています。そのための猟師料理や、鹿、猪肉の美味しい時期、鳥獣保護法の原点が縄文の狩猟に遡る話や鹿・猪の生態など、伺っていると時を忘れます。豊富な体験と技のお話は、『マタギの聞き書き』として本に残したい気持ちに駆られます。

岡崎森林組合

40数年前、岡崎・額田地域には5つの森林組合と模範造林組合がありました。その頃は宮崎地域に入ると木の香りが漂い、製材所をはじめ町は活気に満ちていました。しかしいつの間にか森林組合は額田と岡崎に1組合ずつになって、平成20年には、合併によって岡崎森林組合1つになってしまいました。岡崎森林組合は正組合員・准組合員併せて3000余人、森林面積23,300haの大所帯です。輸入材に押され国産材にとってまだ冬の時代が続いていますが、今年から流域材利用に補助金が付くようになりましたし、少しずつですが公共施設や民間の建物でも流域材の利用が始まっています。

おおだの森保護事業者会（山留舞会—やるまいかい）

『額田富士』と崇拜されてきた山が、時代の変化の中で人が立ち入ることができないほど荒廃してしまったことに心を痛めた人びとが、「水を生みだす森を元気にすることが人間を元気にしてくれるのではないかと、山桜やもみじを育成し植林をし、間伐や下草刈り、登山道の整備を続けておられます。この作業には、地元住民だけでなく地元住民以外の人びとや小中学生の参加も募っています。作業の後は、手作りの料理を囲んで親睦を深める機会もあるようです。経済的な見返りはないけれど地域の心の支えになっているようです。